

## 古書の愉しみ（令和三年四月）

土屋 博

### 一「平假名講釋附 實語教・童子教 全」

和綴。實語を教は、作者不詳、俗に空海の作とも言ふ。平安時代以後明治維新に到るまで、子供用教科書として永らく使用せられ、次の如き文句にて始まる。「山高きが故に貴からず、樹有るを以て貴しと爲す。人肥えたるが故に貴からず、智有るを以て貴しと爲す。富は是一生の財、<sup>たから</sup>身滅すれば即ち共に滅ぶ。智は是萬代の財、命終れば即ち隨ひて行く。玉磨かざれば光無し、光無きをば石瓦と爲す。人學ばざれば智無し、智無きをば愚人と爲す。」と。今讀みて實に含蓄深き言葉なり。

童子教は、平安前期比叡山五大院の僧安然の作といひ、「夫れ貴人の前に居ては顯露に立つことを得ず」など、禮義・作法に觸るる内容多く、矢張り寺子屋等にて教科書として使用せらる。

本書の紋には、「田家山里の童子に授けて初登山の階梯となすのみ」とあり、「安政戊午季春 金屯道人題」との記載あり。

また、本書所有者の墨書あり、「慶應參歲丁卯三月吉日、藤屋兵五郎用」と記さる。僅か三百圓の古書なれど、状態も比較的良し。

### 二「名家尺牘文集 全」岸上操編

（博文館、明治廿五年刊、正價金二拾錢、三二五頁）

編者の岸上操は宇都宮藩士。藩命により司法省學校に入り大藏省に入省。その後博文館に務め江戸時代の文物制度を研究し博覽強記を以て知らる。

序に曰く、「少年諸子因て以て玩味稱唱せば亦必我精神志氣を養ひて以て古人の跡を追ひて後人の範をなすに足らん」と。

目次は、以下に大別せらる。すなはち、精神（北畠親房より山岡鉄舟まで）、武將（源頼朝より島津齊彬まで）、名士（大石良雄より大久保一翁まで）、國學家（賀茂真淵より八田知紀まで）、儒家（中江藤樹より鷲津毅堂まで）、名媛（平政子より靜寛院宮まで）、流（文覺上人より原坦山まで）、著作家（近松門左衛門より山東京山まで）。

藤田東湖の書翰は「拜啓、薄暑愈御安健奉候。小生此間中肩背よりかけて頭痛甚しく籠居罷在候間、病氣の賜にて閑暇を得候」に始まる。

歴史に名を残す名家の書翰文を學ぶは、文語作文上達の早道なりと信ず。

### 三「萬葉評釋」

（古今文學會、明治三十三年刊、定價金二十五錢、一六六頁）

上田萬年氏、序に曰く、「古典の研鑽は諸科の智識に助けあり、個人及び民族の學術技藝を

尋繹し之れが起源に遡り之れが沿襲を知るの門路たりと雖も、亦其の嗜讀は人の氣品を清高にし、人の性情を優秀にし、智識の雜毒を清淨にして、季世の假偽を擺脫せしむるに益有り。」と。

賀茂眞淵渾身の作たる「新採百首解」（嘉永四年刻本）に準據したる内容なる由。

人麻呂の歌「あしひきの山鳥の尾のしたり尾のなかなかし夜をひとりかもねむ」の足日本は長してふ心を表はすに最も適し、これ調べにありて意に非ずと。

志貴皇子の歌については、「たるみの山に冬こもれりし蕨の春にあひて萌え出つる如く、時を得給ふ御よろこびの心をよみ給へる歌なり。」とす。

#### 四「明治元勳 伊藤博文公」日東散史著

（精華堂、明治四十二年刊、一五四頁）

著者序に曰く、「我國唯一の元勳伊藤公は哈爾濱に於て韓人の兇手に殞る。噫悲哉。公は身微賤より起り英邁闊達、遂には位人臣を極め偉業一世を蔽ふ」と。

哈爾濱に於ける様子は以下の通り活寫せらる。「露國藏相の先導にてプラットホームに整列する露軍二個中隊を閲兵しつつ進む中、露軍と日本人歡迎人の間より背廣服の韓人突如として出で來つて拳銃を以て爆竹の音を發せしめた。すると公は『やられた』と一言發せられると側にありし中村滿鐵總裁は前より、貴族院議員室田義文氏は後ろより公を抱いた。然も「なほ公は數歩して『二三發這入つてゐるやうだ』と神色自若として語られ、列車内には人手に助けられて這入り、『何者だ』と聞かれたので『韓人だつた』と答ふると『莫迦な奴だ』と次いで『森もやられたか』と問はれた。側にあつた室田氏は『ブランドーを召上られよ』と進むるとガブガブと飲み干し、暫時して他を斥け古谷祕書官のみを残し何事か言ひ遺され、下車より僅か三十分にして息絶えて了つた。」と。

#### 五「袖珍文庫第六十四編 唐詩選・三體詩合本」

（集文館、大正元年刊、正價金貳拾五錢、唐詩選一七二頁十三體詩一九〇頁）

縦十二・八糎、横九・五糎、厚さ一糎のサイズは携帯に極めて便利なり。

袖珍文庫發刊の主旨には、「泰西にはカッセル、レクラム等云ふ書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素なる小冊子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを購讀し、紳士も携帯に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする」とあり。本書は正に此の趣旨に合致し、常にポケットに忍ばするに最も相應しき一書かと覺ゆ。

解題に曰く、「唐詩選、三體詩は苟も漢學を習つておくといふ者は幼兒からこれを讀誦する習はしであつた。殊に唐詩選の五言絶句の如きは然るべき家の子は暗誦して居たものである。明治十年代まで左うであつた。」と。唐詩選と日本人との關係を示す、實に貴重なる證言といふべし。

#### 六「近古史談字類大全」

(大阪北村欽英堂、大正八年刊、三十五丁)

高木展爲校閲、酒井門次郎編輯。

和綴。「東海中學校第二學年飯田修一」の署名あり。

當時の中學校テキストたる大槻磐溪著の「近古史談」を自習するための参考書なり。

冒頭にあるは、織篇第一、織田氏の世の事を記す。その最初の話題は「了伯平語を聴く」なり。「了伯と言ふ人平家物語を琵琶の音に合せ聴しことを記す。此の物語は葉室行長といふ人の著述にして盲人の語り物とせし書なり」と解説す。鼈頭かめづつには「了伯」の略傳(小次郎と稱し實名は房綱髪を削りて伯と號す。天正十八年三月小田原征伐の時秀吉に従ひ國に還り還俗す、云々)を附す周到振りなり。

七「玉かつま新釋」文學士吉川秀雄著

(有精堂、大正十一年八版、定價壹圓參拾錢、本文二六八頁十索引二〇頁)  
初版は大正九年。

序に曰く、「宣長はどこまでも理性の人であつて感情の人でない。その論文に至つては風雲を捲き起す様な鋭さはないが、その精妙を極め周到を盡くした筆ぶりは實に獨得の壇場で容易に他の模倣を許さぬ。」と。

冒頭は、「縣居あがたみの大人うしは古學いにしへまなびの祖おやなること」。支那思想をきれいに離れて専ら古代思想及び言語を研究する學問は、我が賀茂真淵先生から始まると説く。

吉川秀雄は、明治三十九年東京帝國大學文學部卒。

「玉かつま」は現代に於てもつと注目されて然るべき書なり。

八「國體の本義解説叢書 日本の儒教」教學局編纂、文學士飯島忠夫著

(内閣印刷局、昭和十三年刊、定價二十錢、一〇二頁)

著者の飯島忠夫は明治八年松代藩士の家に生まれ、學習院中等科教授。上田萬年に師事し、東京帝國大學選科を修了。東宮御學問所御用掛も務む。

日本の儒教につき概觀し得る書籍は意外に少なく、國家のお墨付きの見解となると實に貴重。文部省刊行の「國體の本義」を解説敷衍するものなり。

結語に曰く、「現代に於ける儒教の研究は決して古典を購讀するに止まるべきものでない。己れを修める道德と人を治める政治とを天賦の良心を本とする一の理想を以て貫いてその實行に重きを置くところの儒教のやうな學問の方法を参考としなくては、國家を背負つて立つことの出来る眞の人物は養成し得られないのである。」と。

頼山陽の日本外史については、「源平以來の武家の事蹟を記したもので、佛教徒によつて書かれた軍記物語を資料として、その中から佛教的の意味を排除し、之に代へるに儒教的のものを以てしたものである。その文は漢文であるが、平易明快にして光燄あり、大いに讀者を

悦ばせるだけの技倆を具へて居る。・・・直ちに全國に普及し、國史の智識を一般の人士に與へて勤皇の思想を鼓舞するに大なる力があつた。」と。

(令和三年四月十一日)